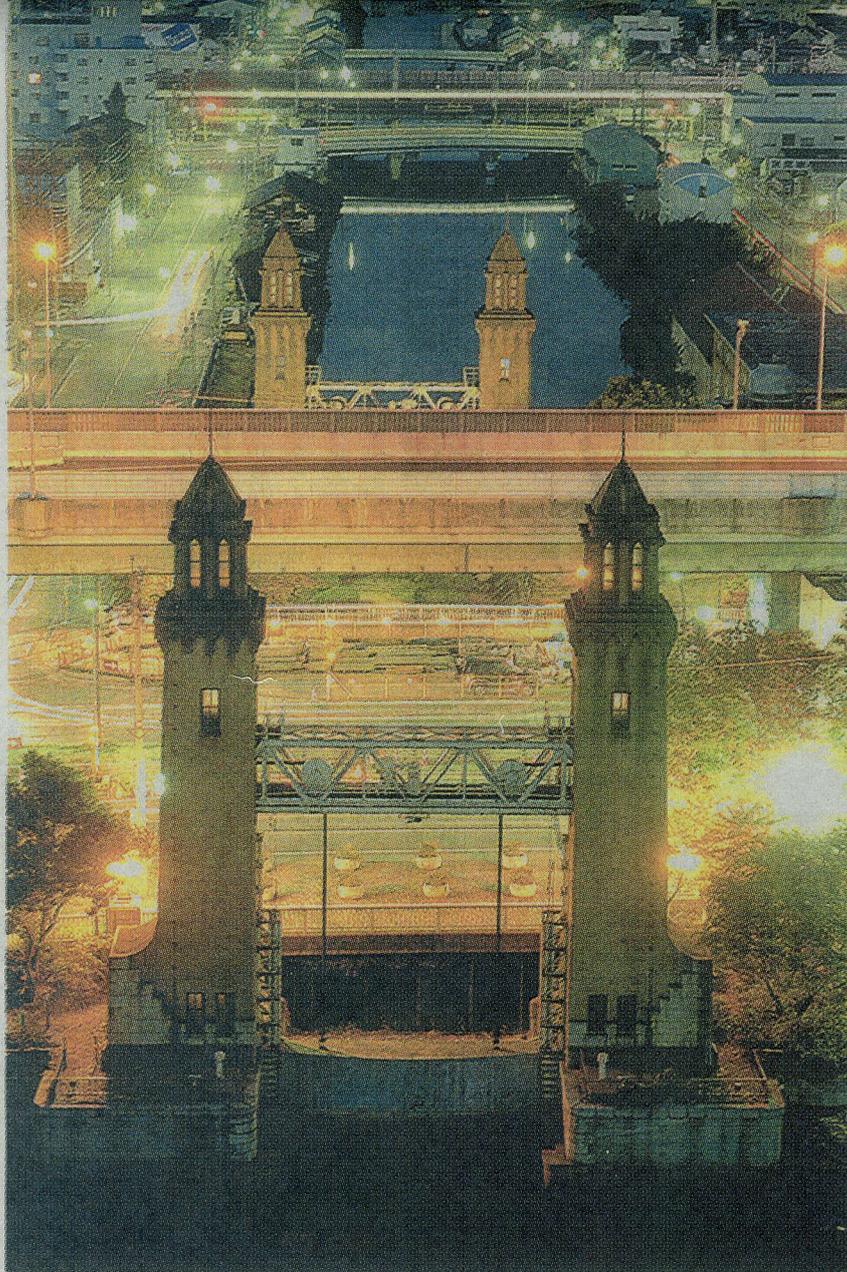


かつて中川運河と堀川をつないでいた松重閘門。夜明け前の明かりに照らされ浮かび上がる―名古屋市中川区で



# 川人もよう

「やっぱり昔のものはし  
 っかりしてるわな」。水谷  
 孝夫さん(63)はいとおしそ  
 うに、所々、黒すんだ塔の  
 側壁に触れた。

「ありましてな」。指さす  
 先を、車がびゅんびゅん走  
 る。「二階から船が来るの  
 を見ながら、ボタンで門を  
 動かすんです」  
 高校を卒業し、名古屋港  
 管理組合に就職。一九六四  
 年に運河係として松重閘門  
 に配属され、三月ほど水  
 門の操作に携わった。

## 中川運河

①

船が行き来したゲート  
 は、今では分厚いコンク  
 リートでふさがれている。  
 「あそこへんに操作室  
 の中のおもりとモーターが  
 挟んで水路を区切り、水位  
 を上げ下げする。いくなれ  
 ば名古屋のパナマ運河。塔  
 前後のゲートで  
 を通過する船を  
 違つため、閘門

**中川運河** 1930年に名古屋港から名古屋市中川区の堀止までの幹線・北支線が開通。その後、堀止から約500m南西に東に枝分かれして松重閘門で堀川につながる東支線ができた。総延長は8.2km。河口部に近い中川口閘門と松重閘門の二つで区切られているため潮位の影響を受けることがなく、名古屋港と市中心部を結ぶ貨物輸送路として活躍した。

## 物流を支えた門番

巨大な水門を持ち上げる。「ガラガラ」と、ゆっくり上がっていくんですわ」  
 昭和初期に開通し、三十年代後半には年間七万隻以上の船が行き交った中川運河。だが、四十年代に入って一気に利用が減った。  
 繁忙の記憶は、ない。「ここに来たところから、陸上輸送に変わっていったからね」。六八年、閘門は静かに役割を終えた。  
 「じつと見ると、動きだしそつな気がするよ」。喧騒あふれる都会のと真ん中。でも、閘門の周りは時間が止まっている。

写真・小嶋彦  
 文・渡辺泰之





中川運河の河口付近で、ボートを楽しむ旭丘高校ボート部OBら＝名古屋市港区中川本町で

## 中川運河 ②

川人もよう

川面を渡る風は、冷たる。授業後、名古屋市東区い。その風を切り裂くように一艘のボートが滑って行く。オールを握るのは愛知

県立旭丘高校ボート部のOBたち。頭に白いものが目立ったり顔にしわが刻まれたりと、年輪を重ねた。だが、六十代半ばから後半という男たちの腕には力がみなぎり、ぐいっぐいっと艇を進めていく。「懐中電灯をボートに付けて、ぶつからんようにしたもんだわ」

秋は目の落ちるのが早

「毎日、毎日、ここに汚れた運河の記憶も鮮通ってね。休んだのは正月ぐらだったな」。同高校十二期生の伊藤寿洪さん(六四)は記憶をたぐ

になった。優勝したら、司令塔のcockスを川に投げ込むのが恒例。「運河ではcockスがいやがってね」

働き盛りを過ぎ、再び運河に集つようになり、夢ができた。

「テムズ(英国)でこぎたい」

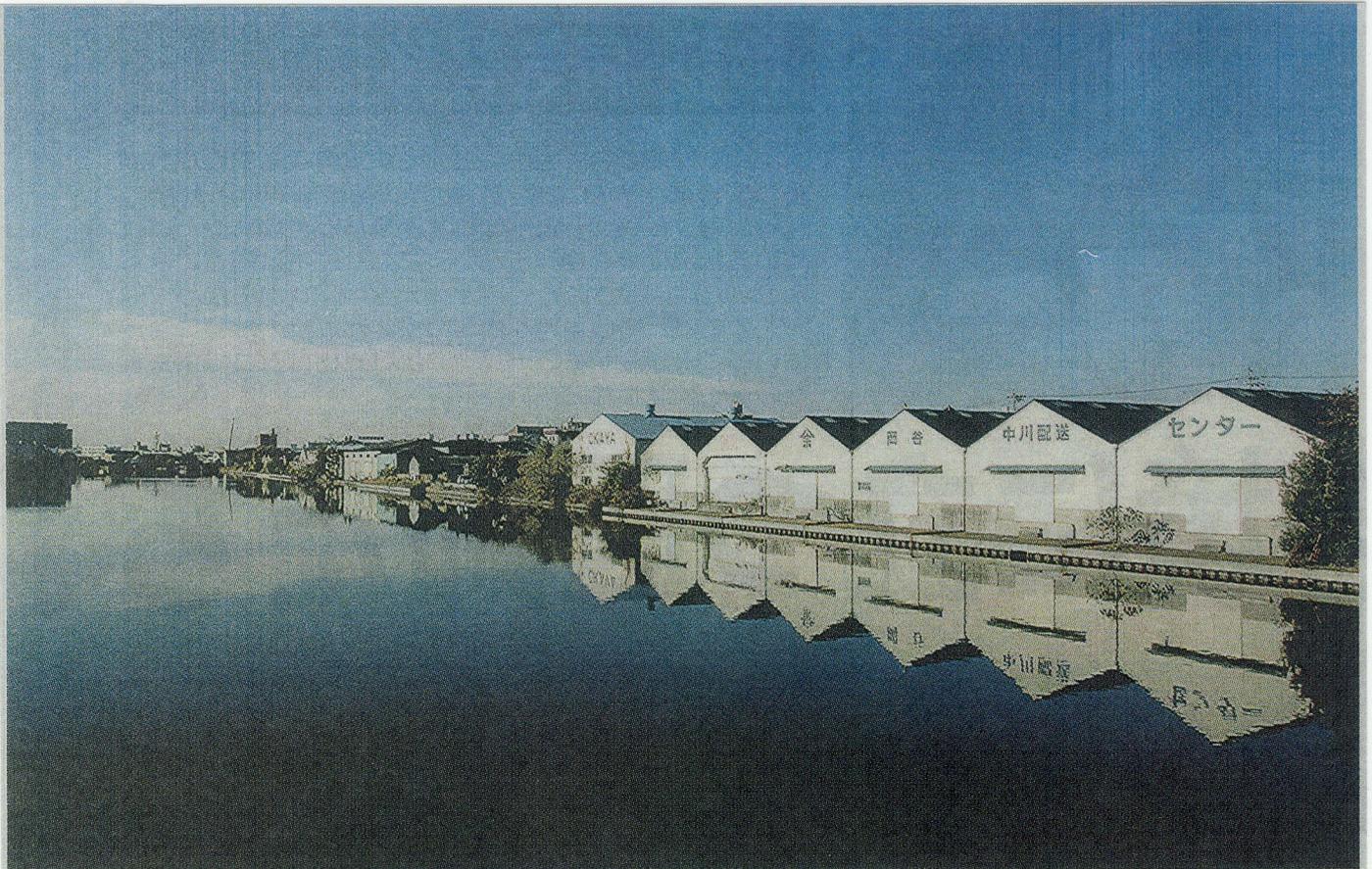
今年九月。そのボート競技発祥の地で、七期から十二期までの十人がついに夢を実現させた。

七期生の長谷川誠さん(六七)は言う。「運河は大切な仲間をはぐくんできた。ふるさとですよ」

ここは、今も青春の舞台。

写真・小嶋明彦  
文・渡辺泰之

## 青春の舞台 仲間再会



澄んだ青空と倉庫街がくっきりと水面に映る一名古屋市中川区舟戸町で

川人もよう

少年が橋から川にぼーんと、小石を投げ込む。材木が川面に浮かび、倉庫街が河岸に迫る。

戦争の影が色濃く残る昭和三十年代の大阪・安治川。モノクロで描かれる映画の冒頭は、川やまち、人のおいを伝える。

宮本輝の小説を原作にし、一九八一年に公開された「泥の河」。少年

## 中川運河

③

少女のひと夏の出会いと別れを描いた。メガホンを取ったのは、この作品がデビュー作となった小栗康平監督。ロケの舞台は中川運河だった。

北から南まで調べに調べたロケ地。戦後の面影が次々と姿を消していく中、幸運な出会いがあった。

「やっと出会えたという思いだった」。既に貨物輸送という役割をほ

## 名作生んだ「泥の河」

ぼぼ終えていた運河だったが、川岸の倉庫街などが残っていた。捨て去られたような風景がイメージに合った。「奇跡的だった」

ロケは八〇年夏、名古屋市中川区の小栗橋周辺で行われた。水は汚かったが、船に乗り込んで撮影していると、ボラがピョンピョンと船内に飛び込む。「命が残っている証し」。都会の川の息づかいを見た。

情熱を傾けた「泥の河」は、多くの賞を受賞。無名だった小栗監督を世に出す名作となった。

その後この地を時々、訪れ、「変わっていない」ことを確認する。「名古屋の人は、この良さに気づいていない。水の表情で、都市は豊かになるんだよ」。映画人の原点となった運河への、強い思いがあふれている。

写真・小嶋明彦  
文・渡辺泰之



製材前の原木を中川運河に浮かべる金田英雄さん  
＝名古屋市港区新船町で

金属音が早朝の運河の静寂を破った。濃紺から薄紫色に変わっていく空に、鳥たちが驚いたように飛び交う。

名古屋港にほど近い名古屋市港区新船町の「金田木材」の製材所。一人では抱えきれないほどの大木がクレーンでつられていた。十層はゆうに超え、重みでチェーンと歯車がこ

## 中川運河

④

すれる。

材木は岸まで運ばれ、慎重に水に落とされる。「ギュ、ギュッ」。巨木同士がこすれ合っって小気味よい音をたて、小さな波紋が川面に広がった。

「珍しいでしょう」。社長の金田英雄さん(四)は言う。今では、運河で貯木する唯一の会社だ。

一九六〇年に父がこの場所で事業を始めた。念願の独立だった。当時

川人もよう

## 父子2世代 材木が宝

は水上輸送全盛のころ。材木は名古屋港沖の貯木場から、いかだに組んで運ばれた。運河沿いには合板工場が軒を連ねていた。

金田木材も最盛期には、現在の十倍の約千本もの材木を浮かべていた。「そりゃ、すごい数だったからね。活気もあったでね」

運河は「生活の糧」。木のおいをかき、働く父の背中を見て育った。水面に浮く丸太は、遊び場だった。「製材の音を聞きながらでも寝ることができるよ」と、顔を崩して笑う。

会社は子どもに継がせず、自分の代で終わりにするつもり。これも時代の流れ。不思議と寂しさはない。「亡くなった父がそつだったように、七十までは働くよ」。職人らしく、からりと云った。

写真・小嶋明彦  
文・渡辺泰之



街中を流れる中川運河に架かるいくつもの橋。それらの下を、波紋を残しながら船が通り過ぎていく＝名古屋市内で

# 川人もよう

## 中川運河 ⑤

ギラギラと太陽が輝く夏。親子がボートに乗って港を出発した。名古屋港区の中川口閘門がツアーの入河口。門が開き、「外海」から運河へ。子どもたちの目がキラキラ輝く。川を北上し、運河にかかる橋を次々とくぐる。橋が頭上すれすれを過ぎていく。初めて見る運河の姿だった。

ツアーは、NPO法人「伊勢湾フォーラム」が催した。湾の浄化に向けて活動する団体だが、湾に注ぐ運河へも目を向ける。

運河イコール「汚い」。いつも付きまとう何とも不名誉なイメージ。「市民から忘れられた存在。だからこそ、良いところも悪いところも知ってもらうんです」。フォーラムの呼び掛け人、小川洋次さん(仮名)は言う。岸まで倉庫など建物が迫る運河。橋の上から水面を臨むしかない。でも、目線を変

## 目線変えたら再発見

えれば、何かが見えてくる。

小川さんは旧運輸省で、伊勢湾を舞台に仕事をしてきた。「湾は疲れている。何か恩返しをしたくなってね」と照れた。

湾に注ぐ運河への思いも熱い。「七十年以上かかって汚したものは、同じ年月をかけてきれいにすればいいじゃないか」

ツアーが終わり、子どもたちが理想の運河の姿を寄せてくれた。

「ごみ一つもない、きれいな中川運河」「いきものたちが暮らせる川」「水がきれいで、子どもたちがたくさんくる公園」

幼い胸に刻んだ運河への思いは、ま

ちの未来へとつながる。必ず。

写真・小嶋明彦  
文・渡辺泰之

◇ 「中川運河」編を終わります。次は最終回の「堀川(名古屋市中区など)」編です。